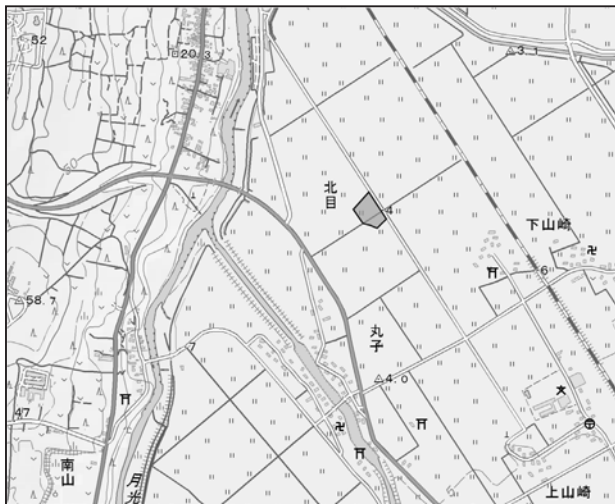


野田遺跡

| | |
|-------|---|
| 遺跡番号 | 461-210 |
| 所在地 | 山形県飽海郡遊佐町北目字野田 |
| 北緯・東経 | 39度05分29秒・139度89分28秒 |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所 |
| 起回事業 | 日本海沿岸東北自動車道（遊佐～象潟） |
| 調査面積 | 7,050 m ² |
| 受託期間 | 平成29年4月1日～平成30年3月31日 |
| 現地調査 | 平成29年6月1日～11月29日 |
| 調査担当者 | 齊藤主税（現場責任者）・植松暁彦・阿部明彦 |
| 調査協力 | 遊佐町教育委員会・庄内教育事務所 |
| 遺跡種別 | 集落跡 |
| 時代 | 奈良時代・平安時代 |
| 遺構 | 掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡 |
| 遺物 | 縄文土器・石器・土師器・須恵器・木製品・石製品・鉄滓・陶磁器（文化財認定箱数：61箱） |



遺跡位置図（1：25,000）

調査の概要

野田遺跡は、遊佐町北目字野田に所在する。庄内高瀬川右岸の自然堤防（微高地）上に立地し、標高は約3mを測る。遺跡は、日本海沿岸東北自動車道（遊佐～象潟）の一部にあたり、平成28年度8月に県教育委員会が事業区内を踏査し発見、同年10月に試掘調査を行い遺跡範囲などが明らかになった。その後、関係機関の協議の結果、平成29年6月より発掘調査を行った。

遺構と遺物

今回の調査では、調査区中央部の標高が高い微高地か

ら奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴群や、井戸跡、土坑、溝跡などが発見された。その両端の調査区東側と西側の低地では湿地跡などが確認された（写真1・2）。

○縄文時代（約2,500年前）

調査区西側の低湿地などから縄文時代終末期の縄文土器片や黒曜石製や頁岩製の石鏃、削器などが出土した。主にキャンプサイトなどの可能性がある。

○奈良・平安時代（約1,200年前）

建物跡（SB）は、調査区北半部で、SB1・2建物跡など当遺跡の主体的な建物が発見された。これら建物の柱穴は、直径約30cmで、一部には柱根が残るものもある。SB1建物跡は、梁行2間×桁行4間の規模で、内部に間仕切りの柱列（3間）も配置され、主軸は磁北からやや東に傾く。SB1建物と重複するSB2建物跡は、梁行2間×桁行3間の規模で、主軸がほぼ磁北をとる。両者は、柱穴同士の切り合いがなく新旧は不明だが、SB1建物の建て替えなども考えられる（写真3）。

調査区南半部ではSB3とした梁行1間×桁行2間の小規模な建物などが確認された。柱根にあたる部分が炭化し、火災などにあったことも推測された。なお、他の建物群もSB3のような、小規模で簡易なものが多い。



写真1 野田遺跡の調査区全景(写真奥に霊峰鳥海山を望む)
 る。齋串は、平安時代の出羽国府とされる酒田市城輪きのわのさく跡周辺で多く出土することが知られ、奈良時代に遡るものは少ない。他に前述した S E 101 井戸跡や S K 102 土坑からも火切り白などと共に齋串が出土している。

他に、袋状の土坑や鍛冶を示す鉄滓(椀型滓)が単発的に確認された。

溝跡(S D)は、調査区中央部と低地の境に沿って、長さ約5~10 m、幅30~50 cmのものがほぼ東西方向に走行する。特に S D 255 溝跡は、細身の柱根が部分的に残り、集落の区画などの役割も推測される(写真7)。

湿地跡(S X)は、調査区中央部の東側と西側の低地に広がり黒い泥炭土の上位に部分的に褐色粘土層も堆積する。泥炭土上面には、S E 101 井戸跡と同じ白色粘土(十和田 a 火山灰か)が混入し、土器片も若干出土する。

まとめ

調査の結果、低湿地に挟まれた微高地上に営まれた奈良~平安時代にかけての集落跡が検出され、遺構では井戸跡を中心とする建物群の配置が確認された。また、遺物では、齋串などの律令祭祀に係る特徴的な遺物が注目される。

井戸跡(S E)は、調査区南半部を主に、木製の井戸杵があるものと、素掘りのものが確認された。S E 101 井戸跡は、井戸杵が長さ約1 mの平面正方形で、その井戸杵を設置するための掘方ほりかたは直径約3 m、深さ約1.5 mと大形である。特に井戸杵は、一辺に縦板たていたが4~5枚配置され、内側に数段の横よこ板が組まれ、鳥海山からの湧水により木材が腐朽せずに良好に遺存する(写真4)。また、この井戸の掘方からは、土器の底部に本県では初出の「嶋」と書かれた墨書土器が出土した(写真5)。なお、井戸杵内の堆積土中位に白色粘土が薄く堆積し、青森県の十和田 a 火山灰(西暦915年降灰)の可能性があると推測される(写真6)。他に S E 101 井戸跡の周辺には、直径約2 m、深さ約1 mの素掘りの井戸跡も3基ほど発見された。

土坑(S K)は、主にゴミ捨て用の大型の穴と考えられ、調査区の北側と南側にまとまって確認される。

特に S K 2 土坑では、齋串がまとまって出土し注目された。齋串は、長さ約20 cmの木製の細長い板材を利用し、頭部の先端を山形に尖らせ加工したもので、当時の厄払いなどの祭祀に用いられたとされる(写真8・9)。供伴する土器から8世紀末頃の奈良時代のものと推測され

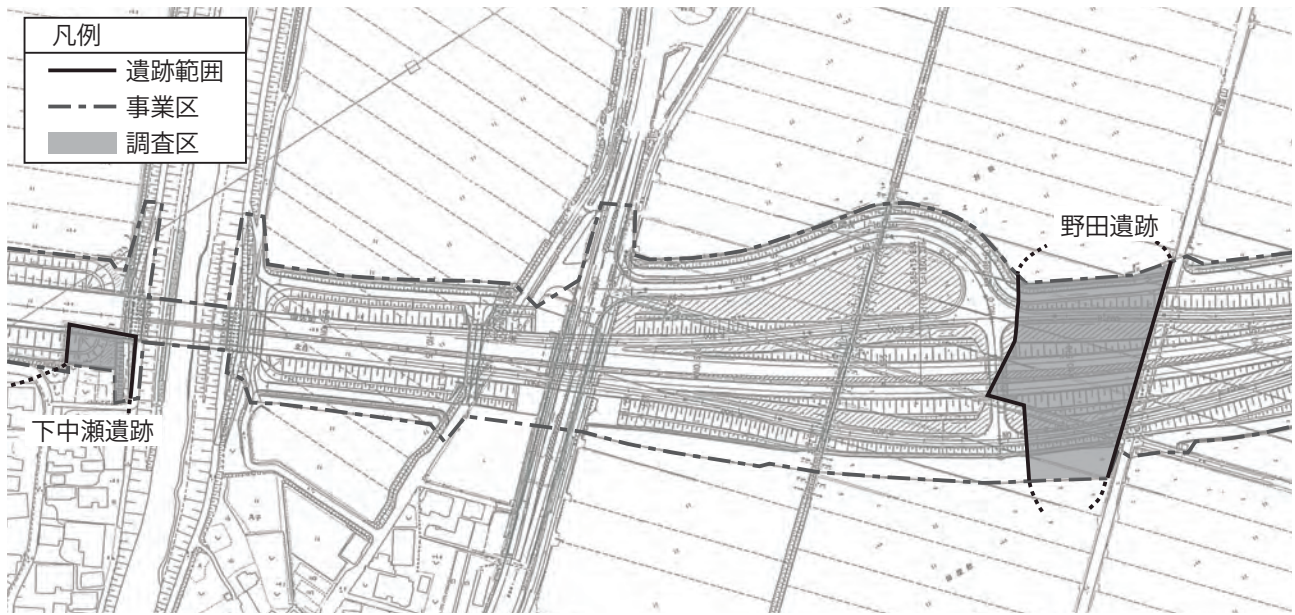


図1 遺跡概要図 (S = 1/4000)

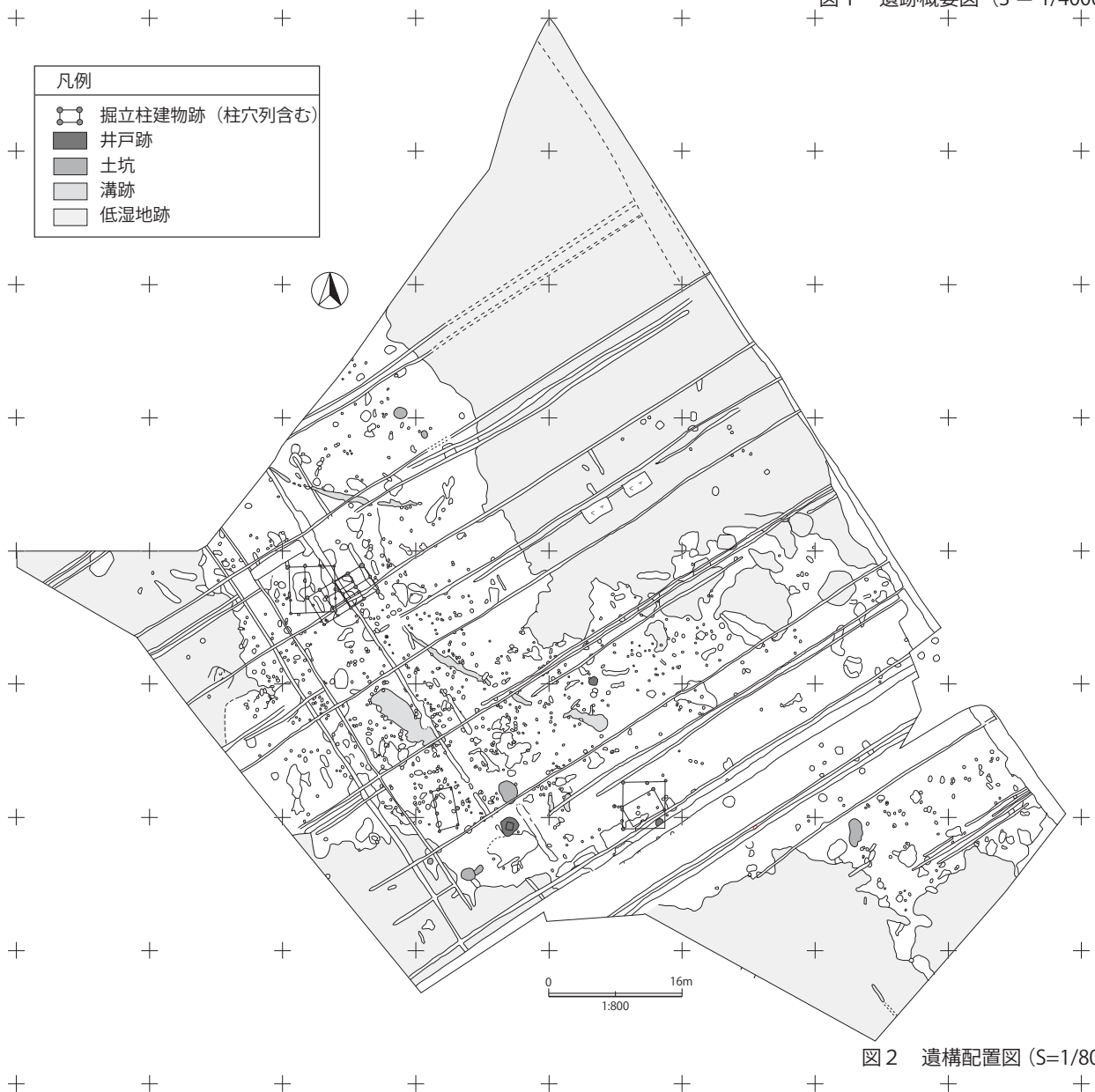


図2 遺構配置図 (S=1/800)



写真2 調査区全景(空中写真)



写真3 SB1・2建物跡(SB1は黒線、SB2は白線)



写真4 SE 101 井戸跡の井戸枠(縦板・横棧)状況



写真5 SE 101 井戸跡の掘方出土の「嶋」墨書土器



写真6 SE 101 井戸内の白色粘土層(十和田a火山灰か)



写真7 SD 255 溝跡の打込み杭出土状況

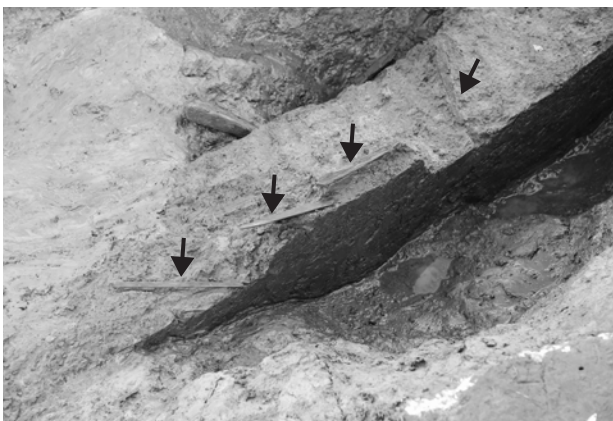


写真8 SK 2 土坑跡の齋串出土状況



写真9 SK 2 土坑出土の齋串群